医王寺の歴史―棟札（むなふだ）を読み解く―

医王寺は、寛文五年(一六六五)に、現在の袋町に移築再建され、当時の棟札が伝えられています。棟札とは、建物の由緒や建築年月日、関係者の名などを記して棟木に打ち付ける札のこと。

この棟札には、病気がちの松井寄之(よりゆき)を心配した妻の崇芳院尼(すほういんに)が、仏教の教えを信じ、医王寺を再建したことが記されています。松井家の歴史書『松井家譜(かふ)』によると、寄之は長らく持病に苦しみ、寛文五年にも再発、翌年逝去したことが記されています。このような時期の崇芳院尼の医王寺再建には、深い思いがあったことと想像されます。

なお、文末に、「豊臣氏女」と記されていますが、これは、松井家の初代康之が従五位下に任じられた時(一五八六)、豊臣秀吉から豊臣姓と菊桐紋を拝領しており、以来、松井家ではこのように豊臣姓を名乗ることがあります。

【本文意訳】

西海路の肥後国八代郡にある医王寺は、薬師仏を安置する寺院である。昔は薬師如来の脇に日光菩薩、月光菩薩、十二神将が整然と並んで仏法を守り、堂宇は南北に広がり邪気を寄せ付けず、美しい寺院であった。天正・文禄（一五七三～一五九六）のころ、国は治まらず、残念なことに、以来この寺は衰退して本尊一体がひっそりとあるだけの草堂となった。ここに信心深い御夫人がおられる。もっぱら善行をこころざし、丹誠（まごころ）をつくすお方である。この寺の由来を聞き、建物を改築し昔のようにし、城主長岡佐渡守寄之（松井寄之）殿の除病息災を祈ろうとされている。寄之夫人（崇芳院尼）は家臣に命じて、大工・石工の腕の良い職人を集めて縄墨を張り、良き日に柱を立て、吉日に上棟して、その作業を終えた。寺は全てにふさわしいものを備えており、堂内の調度は美しく、仏前への供養も盛んになった。なんと素晴らしいことではないか。城主（松井寄之）の小病は、邪鬼がもたらす病なので、薬師如来の功徳をもって治すべきで、いままで癒されなかったのは、仏教への配慮がなかったためである。『薬師本願経』によると、薬師如来の功徳により衆生の病は悉く取り除かれ、心身ともに安楽になるという。そもそも釈尊は病院を作り伝教大師（最澄）も比叡山に病院を立てた。寺院と病院を同所に置く所以である。上梁の後は、薬草は日ごとに肥え、玉壺光浄大将は昼夜城主の武運を守り、夜叉は七千の威力を振るい、願をかけられたこのご夫人（崇芳院尼）の寿命を延ばし、更に良い行いを積まれたご当家が子孫代々まで繁栄し、功徳の風はこの世あの世にも立ちのぼり、末永く続くことを祈るものである。

時は寛文五年十月吉祥日　　大願主　豊臣氏女敬白（松井寄之妻・崇芳院尼）

【棟札表面】

修験法印　乞　養清坊怨心悉除祈　惣奉行　井上孫右衛門尉好也
法　佛風裁応身　普請奉行　香川三右衛門尉正幸
河原又兵衛尉　守次
種子　水災　金　巧匠　野尻久兵衛尉　秀勝
（大日如来）　意　蓮火災報口　預坊修験　権大僧都法印寶光院玄龍
城裡安全家中除災所
白木山妙見宮法雲院大阿闍梨法印良尋誌

【棟札裏面】

△

聖主天中无
迦陵頻伽聲
奉再興薬師堂
相愍衆生者
我等今敬禮

西海路、肥後州、八代郡、醫王寺者、薬師佛安座之道場也、昔年、脇仕日月十二神將巍々持念、子午蕩々阿、禁邪鬼道場、亦美麗也、天正・文禄ノ比、國家不治、悲哉、爾来此堂衰微、本尊一軀秘在乎草宇裡耳、茲在信夫人、志專自善行、竭丹誠、側聞此堂之来由、將改觀准古、以祈城主長岡佐州寄之賢太人之除病息災、因令家臣促木石良工、規縄墨、立柱于良辰、上棟于吉曜、已畢其功、且全備所宜、有之道具而荘嚴、寶前伸供養矣、奇哉、盖夫城主之微恙、不出四大業鬼之痾者、即以阿伽陀喜見不死之薬治之、若不愈者無有是慮、本願經曰、衆病悉除身心安楽、抑世雄造療病院、傳教建此叡山、同安置之者有以哉、抑乞上梁之後、薬草日肥、玉壺光浄大將司二六時中鎮城主之武運、夜叉振七千威力、永延願女之嘉齢、更祈善根所萌子枝孫葉榮屆万歳、徳風所上自界他方恵及千秋

旹寛文五乙巳年十月吉祥日　　大願主　豊臣氏女敬白

（解説　福原・石原）